兒童心理學文獻抄 十九

牛島義友

兒童畫の問題

前回人物畫の發達を述べたが、彼の頭と足丈の人、體は正面向き乍ら、顏は横向きの人、几張面に五本描かれてゐるが、腕の割りに恐しく長い指、斯る繪も實は小兒の精一杯な表現であり從つてそこに多くの問題が含まれてゐる。

彼等が描かんとするものは皆立體的な形を具へたものである。之を平面的の一枚の紙に描き現はさなければならない。又表現せんとする觀念は靜止的のものとは限らず、變化し、展開しつゝある事件である。之を一枚の紙に描き出さねばならない。此處に多くの困難と子供らしい解決法がある。先づ立體の表現に就て述べやう。

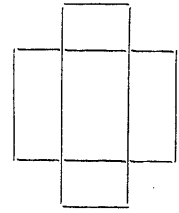
竹田俊雄　兒童の描畫作用に就て心理學研究、第九卷

四歲から七歲迄の幼兒五十名に次の樣な實驗を行つた。先づ立方體を子供の前に置き、それを寫生させた。幼兒敎育に經驗のある方は直ちに推測出來るであらうが、年長者の樣な遠近法的な描き方の出來る者は一人もなく大部分の者は唯一つの四角形を描く丈であり、少數の者はその四角形の四邊に更に四角形を描きそへてゐる（イ圖の如く）。

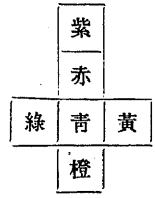
次に立方體の各面に赤、青、黃、紫、綠、橙の色を塗つた物を見せて描かせた所、やはり前同樣に單一の四角形を描き、唯四隅の線をそれぞれ色別けして現はさうとしたり、六つの色を全部現はさうとしてロ圖の如く描いたり、或ひはハ圖の如く描き竝べたりしてゐる。

斯る故に子供が四角形を描くのは夫で立方體の唯一面を描いてゐるのでなく立方體の全部を表現してゐるつもりな

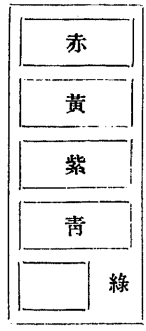
イ



ロ



ハ



のである。斯る幼稚な描き方をするのは彼等は大人の樣な遠近法的描法を知らない爲許りではない。今遠近法的に描いた立方體の繪を見せて夫を模寫させてもやはり大部分のものは單なる四角形を描いて居り極少數のものが手本通り遠近法的に描いてゐる。而も彼等に云はせるこ手本の樣な書き方より自分等の方が正しいのである。

尤も彼等は手本の立方體を四角形こして知覺してゐる譯ではなく、ちやんこ立方體こして見てゐる。唯それを繪畫的に表現する時に四角形こして現はすのである。その證據には粘土で作らせるこ手本通りの立方體を作る。

その他圓柱、三角柱、四角柱、圓錐、三角錐、四角錐を手本こしても皆同じ樣な結果で、卽ち見えるまゝの形(perspetiv)ではなく、觀念して居るまゝの形に描く。斯る物を直視態的(orthoskopisch)こ云ふ。尙斯る表現機能に關しては梅津氏の研究からは敎へられる所多い。(梅津八三、描畫作用の機能的考察、心理學研究第六卷)。

次に第二の問題卽ち時間的經過を如何に一枚の繪に表現するかに就て、リュケの說明があるが此のリュケの說を用ひて整理した夢の繪の研究をのべる。

波多野いそ子　兒童の夢の繪、心理學研究第七卷

女史は小學三年の子供に一番よく覺えてゐる夢を繪で描き現はさせ、此の夢の繪卷物を次の樣に整理してゐる。

第一型　物語中の最も重要な瞬間を取り出して描き、それによつて物語全體を推知させるもので、例へば「窗に乘つかつて何か見てゐたら倒さに落つこつちやつた」等こ云ふ恐かつた夢を描くのに先づ家の形を描き、その窗の所に人の形を倒さまに描きそへてゐる。

第二型　事件の樣々の瞬間を別々の繪によつて現はし、

之に番號をつけて時間的順序に配列したもので、漫畫等によく見られる樣式である。併し之は餘り用ひられない方法らしい。

第三型　一枚の繪の中に事件の種々の瞬間を全部描てしまふ方法である。此場合重要な人物が其運動の變化に應じて繰返して描かれる。法隆寺の玉蟲厨子の臺座の繪の如く。

第四型　之はやはり事件の異つた瞬間を一枚の畫面に書てしまふが、同じ人物は一度しか出て來ず繰返しをしない。

次に繪畫の主要素たる構圖、形象、色彩の發達の研究に一言しやう。

植松正　兒童畫に於る構圖の發達、教育心理研究第四卷氏は幼稚園並びに小學生兒童の描いた繪の構造を發達的に見ると線を左右に描きちらす搖筆錯畫の時代にはまだ構圖的のものは全然ないが、丸いものを描く廻筆錯畫期になると圓を紙の眞中に描いて初めて構圖の初步的なものが現はれる。併し次に何か物の形を現はさうとする頃になつて初めて眞の意味の構圖が問題となる譯である。此の場合に見られる構圖は畫面の中央に唯一つの形を描いたものと二個以上のものを描き並べたものがある。前者は統一はあるが單純であり、後者は多樣であるが統一を缺いてゐる。併し統一がないと云つても意味の上からは立派に統一があり、卽ち物語的統一が見られる。更に發達すると形式上からも統一が見られるが、之は小學校頃にならないと見られない。小學生の描いた繪(橋の繪)をA、遠景近景共に具はり布置よろしきを得たもの、B、遠景又は近景いづれか一方のみしか具はつてゐないが、布置よろしきもの、C、離れ〳〵であつて統一性乏しいものに分けて整理すると一、二年は無統一のものが主であり、三年頃からB的のものが增し、六年位になつて初めて遠近の釣合ひのとれたものを描いてゐる。

植松正　兒童畫に於る形象の發達、教育心理研究第四卷次に描かれた形象を主として其釣合ひの上から考察するに錯畫期は謂ば豫備段階であつて未だ形は認められず、次の圖式畫段階に到つても、イ、不可解な形象、ロ、說明を待つて理解される形象、ハ、表現內容を明示する形象の段階に分ける事が出來る。釣合ひの非常に惡いもの(例へば蜻

蛤を描くのに傍の人よりも大きく描いたりするもの)は小學二年生頃からは減ずるが、併し正しい釣合ひ(人よりも蜻蛉の方が非常に小さく描かれて不釣合ひの感じを起させないもの)は小學校卒業頃にも未だ二割位で、大部分の者は其中間位のものを描いて居る。

植松正　兒童畫に於る色彩の發達、教育心理研究第五卷

二、三歳の幼兒は赤色を好んで用ふるが、次に意味もなく色々な色を用ひたがる時期がある。例へば櫛の齒を一本一本別の色で描いたりする(裝飾的多色畫の段階)。次は觀念的多色畫の段階で、花は赤、葉は綠、土は褐色と云ふ風に事物に就いて有して居る色彩觀念を其儘現すものである。最後に寫實的多色畫を描き、見ゆるがまゝの色を用ひて描かんとする。

以上は兒童畫を主として短的な方面から考察し、技功的な點を問題とした。併し兒童は元來子供の心、子供の興味、個性が現はされて居るものであるから、此方面を見落すのは片手落と云はねばなるまい。

畠山勤子、濱名かの子　兒童畫に於ける構造の分析的研究　教育心理研究第五卷

滿一歳から六歳までの六百名餘の幼兒の畫題から其興味の發達をみるに一歳は錯畫期であるから其興味を覗ひ得ないが、二歳兒は旗を好んで描き三歳では其他家、景色を描く、四歳兒は旗の代りに家が增し、其他汽車自動車等活動的なものが增す。五歳兒は同じ家を描くにしても花・木・山を描き添へ、景色には太陽・人・家が主要なものとなり、其複雜になりつゝある生活狀態を反映する。六才兒では人を對象として描く者が特に目だつて來る。(尙此研究には構圖其他の技功的方面が取扱はれて居る)。

豐明幼稚園、波多野、横山、兒童畫に現はれた個性の研究　教育心理研究　第八卷

幼稚園兒に一週間每日自由畫を描かせ、其繪に現れた個性と、幼稚園生活に現れる子供の性格との關係をしらべたものである。

先づ每日描いた畫に畫題の上から或は構圖筆致の上から著しい統一があり、一致のあるのに驚かされるが、斯る描き方を類型化して其繪の型と、子供の性格とに深い關係が

あるのに一層驚く。例へば

第一類　同じ主題が殆ど毎日描かれて居る。其繪は平凡で、ありふれて居り、又繪に動きがなく、筆致に生彩が無い、又繪に中心がなく纏りが無い。斯る繪を描く者の性格は、元氣がなく、子供らしい朗かさがない、從つて活動的でない、又他に付して印象的でない爲に友達にも其存在が認められない。等

第二類　A、畫題は毎日變るが、構圖色彩にははつきりした統一のあるもの、卽ち毎日が生き〳〵と變化して居り、而も此子供でなければ描けないと云ふ特質を持つて居る。斯る作者等の性格は怜利で圓滿な誰にも好かれる級長型の子供であつた。

B、種々の傾向が雜然と集合して居り、統一のないもの。斯る繪の作者は負けぎらひとか、氣分家、意地つぱりであつた。

第三類　對立する二つの傾向のあるもの。例へば初めの三日は生き〳〵したものを描いて居るが、後の三日は活氣の無い繪を描いたりする類であるが、其性格は「その時その時で變る。よい時には全くすなほであるが、すね出したら最後、何と云つてもきかない」子供であつたりする。

次に筆致の精粗其他から分けて、

第四類　筆致の非常に荒いもの、一つ一つの線が非常に太く、勢がある、クレオンが紙にさはるや否や、サット、自分の思ふ方へと自由自在にかいて行つた筆のあとが見える。斯る繪の作者は「がき大將で人に好かれぬ、落つきがなく、ものに努力しない」子だつたり、「どちらへのびるか未だ見當が付かぬ。併し何がよい素質があると思はれたりする子供である。

第五類　筆致の非常に柔い、むしろ生氣のないものであるが、其作者は保姆等から「人には好かれる方であるが氣が小さい。何でも始末を一人でするが積極的でなく、ちゞこまつて居る」と評されて居る。斯くして描かれたものゝ中に子供の個性がよく現はされて居て、個性研究に何物かを貢獻すると思はれる。